

令和6年度



# 鹿児島県の教育

12月号

## 巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会高等学校長部会副会長

鹿児島県立甲南高等学校  
宮田 俊一

## 人権教育は全ての教育の基本

本校の特色ある取組の一つに「甲南タイム」がある。本校のブログには、「生徒がクラスメイトに向かって、自由なテーマでスピーチする時間のこと」と紹介している。毎月一回全校朝礼の時間帯に、各クラス三〜四人の生徒が自由なテーマで発表している。

最近読んだ本、映画、ペット、部活動、雑学クイズ、音楽、アニメ、推し（韓国のアイドル等）、楽器の演奏、コント、マジックなど、多彩なテーマについて、プレゼンテーションや演技等を行っている。また、時には小中学生の頃の思い出、自分の黒歴史、自分のルーツといった自分自身について語っている生徒もいる。

赴任して一年目は、本校で取り組む文部科学省指定のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の課題研究における発表の機会も多いため、「甲南タイム」でも、発表力の向上のみに注目していた。しかし、今年度の人権教育管理職研修会における研究協議に参加して、各学校の人権教育の取組事例について意見交換する中で、「甲南タイム」は、生徒の人権感覚を育む素晴らしい取組であると気付いた。

発表者は、時に自分自身のことを他人にさらすことになり、それは勇気がいることであ

る。また、それを受け止める聴衆者も発表者を尊重する姿勢が必要である。まさしく、これは「自分の大切さとともに他人の大切さを認めること」ができる人権感覚を育む取組である。

学校における人権教育とは、例えば、学習指導要領の前文には、「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようになること」とある。また、本校の学年の努力目標には、「多様性を認め、自他ともに思いやる心優しい豊かな人間性を育む」という文言を掲げている。

「人権教育は全ての教育の基本」と言われているが、本校ではこれまでLHRや人権週間等での特別な取組であったと思う。「甲南タイム」や「教科」・「総合的な探究の時間」など、全ての学校教育活動の中で人権感覚を育む取組がもっとできるはずである。特別でない取組でこそ、学校生活はもろろんのこと、学校生活以外でも自然に人権感覚が発揮されるのかもしれない。そのためにもあらゆる機会を捉え、人権教育に取り組んでいきたい。

令和6(2024)年 12月号

一般財団法人鹿児島県校長会館  
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13  
振替 02030-1-3192  
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷  
鹿児島市東坂元二丁目29-1  
TEL 247-1605 FAX 247-2844

### \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



## 随想



### 日本の農業に答えを。

カミチクグループ 代表 上村 昌志

カミチクグループの原点は、「牛飼い」です。今から約四十年前、たった四人で始めた小さな会社は、事業に対する熱い思いを胸に、時の運、人の縁に恵まれ、発展を遂げてきました。「世界中の人に生産者の想いと美味しさをつなぎ、喜びと元気を提供する」という使命を掲げ、約四十年かけて創り上げてきた「六次化スタイル」は、更に研ぎ澄まされ、食料産業として世界へ飛躍しようとしています。

焼酎の大好きな父が、三人の息子を前に、毎晩ダレヤメをしながら語ってくれた言葉が今でも心に深く残っています。「農業は、人の命の源、元気の源をつくる大切な仕事だ。だけど、自分で値段をつけることができず、儲からない。だから、長男は、鹿児島で一番の牛飼いになれ。次男（私）は、その牛をしつかり売り切れ。そして三男は、兄たちが作ったものをさらに価値がつくような飲食店をやれ。」まだ幼かった私たち兄弟に、父は農業という仕事の厳しさ、その中に未来を見据えた可能性を教えてくれました。

この父の教えが、現在のカミチクグループのビジネスモデルの基盤となっています。カミチクグループは、九州圏内を中心に、飼料の生産から、牛・豚の飼育、食肉の製造・加工・卸売、

小売業や飲食業を一貫して行い、独自の六次産業化「六次化スタイル」を事業の基本として進めてきました。この一貫体制を構築することで、付加価値を生み出し、地域や産業全体を活性化させることが可能になります。しかし、現代の農業は、生産だけでは解決できない多くの課題に直面しています。特に、世界的な食料不足や気候変動に対応するためには、従来の方法では限界があります。世界人口の増加に伴い、食料の安定供給が求められる一方、限られた資源でどのように持続可能な生産を維持していくかが大きなテーマとなっています。こうした世界的な課題に対しても、持続可能な農畜産業を目指す取組を進めています。例えば、各地の休耕地や耕作放棄地を活用し、牛・豚のエサとなる稲などを生産、また、牛や豚の飼育過程での廃棄物の再利用を促進し、環境負荷の軽減に努めています。さらに、食品加工・製造の現場では、衛生や品質管理を徹底し、世界基準の衛生・安全性を確保した商品の提供が可能となっています。このように、農畜産業は、単なる生産の場にとどまらず、環境や社会に対する責任を果たしながら、食料供給の未来を見据えた持続可能なシステムとしての成長が必要不可欠です。そして、国内だけでなく、海外にも「六次化

略 一九八〇年 公益社団法人全国食肉学校 卒業  
一九八〇年 有限会社今村フード入社  
一九八二年 有限会社牛専を共同設立  
一九八五年 有限会社上畜を鹿児島市で創業

※現・株式会社カミチク

スタイル」を拡張、食肉の輸出や飲食業を通じて、世界中に和牛の魅力を伝え、農畜産業のノウハウを他国と共有することで、グローバルな視点での農畜産業を目指しています。食を通じて、国や文化を超えて人々をつなぎ、未来の食料問題に向き合うことも大切であると考えています。

さらに、私たちは「かっこいい農業」の実現を目指しています。若者たちが農業に魅力を感じ、誇りを持つて働けるような環境を整えることが、農業の発展に必要なと考え、カミチクグループでは、次世代の農業人育成に力を入れ、農業の未来を担う若者たちに新たなビジョンを提供しています。

これからの農業は、単なる生産の場ではなく、環境や社会に対する責任を持ち、未来の食卓を支える産業へと進化していかなければなりません。農業に新しい風を吹き込み、未来を切り拓く若者たちと共に、私たちはこれからの農業を更に進化させたいと考えています。農業は人々の生活を支える基盤であり、その重要性は、今後ますます高まっていくでしょう。私は、農業が未来の社会を支える鍵であり、これからの日本や世界の発展に大きく貢献できると信じています。



## 現場の指揮官

西出水小(北) 坂之上 辰 志

「いくらまわされても針は天極をさす」これは高村光太郎の言葉である。先生にとっての天極は何ですか。」と問われると「学校は子供のためにある。」と答えている。子供のための学校にするにはどうすればよいのか、自問自答の日々である。

### 一 平時の指揮官

#### (一) 自立した学習者を育てる

コロナ禍の中で感じたことがある。私は、子供の学ぶ意欲や態度、学び方について育んでこなかったのではないかと考えている。課題を与えられなければ学習できない子供や指示がないと学んでいけない子供の状況から、自立した学習者に育てることの重要性に気付かされた。学ぶ方法を身に付けさせるとともに、自分はどうのような状況にあるのか気付き、どうすればよいのか考え、行動する自己調整力を培うことで自立した学習者として育てていけるのではないかと考えた。

#### (二) 基礎学力の定着

問題解決的な学習の充実に向けた教育実践を図ってきたが、基礎学力に差がある状況では、見通しをもつまでに時間がかかったり、理解の状況を確認ができなかったり

するなどの課題が見られた。学習内容や子供の実態によっては、分かりやすく教え、よい問題を解くことで理解を深めるなど、様々な形の授業が展開されてもよいのではないかと考える。その際、分かりやすい問題で獲得した知識は、より分かりにくい問題には活用できない可能性が高いことを踏まえ、子供たちにより問題を提供することが重要となる。よい問題とは、基礎的な知識を活用する課題であり、子供たちが協力しなければ解けないような問題である。よい問題からは必然的に協働的な学びが生まれる。

基礎学力の定着については、各学校で様々な方法が取り組まれており、どれも効果的である。学校の実態に合わせ、どの順番で、どのタイミングで、どのくらいの期間実施するのかといった視点から方策を練ることも必要だと感じる。成果が出なければ、潔くやめることも大切だ。

#### (三) 教職員の同僚性を高める

私自身も、そうだが教職員は、専門性が強く、自分一人で考え実践することにやりがいを感じる傾向にあるように思える。また、自分の成功体験をいつまでもコピー

してしまい自己更新ができない状況もあるように感じている。

このような状況を改善するために、教職員一人一人の専門性をコミュニケーションでつなぐ場を意図的に準備する必要がある。教室を開き、授業や子供のことについて話す機会を増やすことで世代間のギャップも埋まり同僚性が高まり、学校が活性化していくように思える。研究協力校の指定を受けることは即効性があり効果的だ。

### 二 有事の指揮官

地域とともにある学校として検討しておく必要があるのは、災害等で学校が緊急避難所になる場合への対応だ。避難所に指定されいなくても、これまでの災害から、「人が集まったところが避難所になる」ことがある。災害時には、開放した教室から避難者は動かない状況になるため、避難所となった場合の学校を想像し準備しておくことが大切だと考える。

#### (一) 居住エリアと運営エリア

居住エリアは、一般避難者と要配慮避難者への対応が必要となる。(高齢者・妊婦・障害者・ペット同行者・感染症等)

運営エリアは、避難所の運営に当たり開放しないエリアである。会議室や食料・救援物資を搬入し、保管・配給するエリアの確保が必要となる。

#### (二) 学校再開に向けて

教育活動の再開も念頭に入れ、状況に合わせた段階的な対応も考慮する必要がある。(教育エリアと避難所エリアを分け、段階的に運営)



## これからの予測困難な時代を生き抜く力 「負けじ魂」とICT活用能力」

羽島中(日) 高 田 百香里

### 一 はじめに

これからの子供たちが生きていく社会は「VUCAの時代」と呼ばれ、複雑で不確実、予測困難な世の中となることが叫ばれて久しい。同じように、混迷を極めた時代が日本の歴史にはあった。今から約百六十年前の一八六五年(元治二年)、鎖国の禁を破り、いちき串木野市羽島の港から英国へ密出国した十九名の若き侍たち。そして、初代文部大臣の森有礼、大阪商法会議所創設の五代友厚、帝国博物館(現東京国立博物館)初代館長の町田久成など、混迷を極める幕末から近代において、彼らが成し遂げた偉業は枚挙にいとまがない。この時代、外国では命の保証はないと考えられる中、国禁を犯してまで、しかも薩摩藩のことだけでなく、日本の将来を憂えて旅立ったこの若き志士たちが現代日本の礎を築いてくれたことは、凄まじい史実であり快挙といえると思う。

このことに鑑みて、同じ「予測困難な混迷の時代」を生き抜くために、これからの子供たちにとって真に必要な力とは何か、考察し

てみたい。

### 二 予測困難な時代を生き抜く力としての「負けじ魂」とICT活用能力

文科省の掲げる「育成すべき資質・能力の三つの柱」の三角形の頂点にあるのが「学びに向かう力、人間性等」である。しかし、目に見えない力(非認知能力)であるがゆえに、この力を伸ばしたり結果を検証したりという取組の具体は、なかなか難しい。

一方、この力の育成に当たっては、他の二つの柱以上に、児童生徒や学校、地域の実態を踏まえて指導のねらいを設定していくことが重要であることも同時に示されている。

本校は前述した薩摩藩英国留學生の旅立った羽島の地にあり、本誌令和四年度八月号の「随想」に寄稿されている、元いちき串木野市長、田畑誠一氏の生まれ育った地である。田畑氏を始め、地元の方々の薩摩藩英国留學生たちに対する尊敬の念とその偉業を大切に顕彰していこうという思いには、驚くほど強いものがある。

この地で昔から継承されている「羽島の伝

統、負けじ魂」を本校の教育目標に据えて二年目となる。子供たちが、この羽島の地に育まれ、継承されてきた歴史や文化を誇りに思うこと、そして何よりも、これからの社会で立ち向かうであろう様々な困難にも負けない「負けじ魂」をしっかりとその精神に根付かせ育んでほしいという思いをもって全職員でこの教育目標実現のために取り組んでいる。

また、これからの時代には、ICT活用能力が必要不可欠となってくる。昨今のインターネットやSNSの普及による、世の中に溢れる膨大な情報の中から、正しく有益な情報を見極め、取り込む能力は、問題解決能力や意思決定力等と共に非常に重要となってくる。本校ではICTを活用した本校独自の取組である「アウトプッターニング」において、こういった力を身に付けさせ、伸ばす研究を推進している。

### 三 おわりに

これからの時代を生き抜いていくために必要な「学びに向かう力、人間性等」を培うためには、今、改めて薩摩藩英国留學生のような先人たちの「何事にも負けず世の中を切り開く精神力」に学び直すことが必要ではないだろうか。そして、これからの世界を乗り切つてゆくためのICT活用能力を確実に身に付けられるような教育の実践をしていかなければならない。子供たちが将来を悠々と乗り越え、更に豊かな社会を創造し、逞しく生きることが願って。



## 協働した教育活動による

## 子供の育成を目指して

今和泉小(南) 塩屋 親 徳

### 一 はじめに

本校は薩摩半島の南部、指宿市の最北部に位置し、眼前には風光明媚な隼人松原や錦江湾が広がり、環境に恵まれた場所にある。大河ドラマで一躍有名となった篤姫の故郷として知られる、今和泉島津氏の仮屋跡に開設され、創立百五十一年を迎える歴史と伝統をもつ学校である。現在、全校児童七十三名、学級数は九学級である。

### 二 学校経営の重点

学校教育目標を「夢をもち郷土を愛し自ら学び考え行動する今和泉の子」と設定し、自分の将来を考え、身近な郷土のよさを知り、自分から学ぼうとする人になってほしいとの願いを込めている。また、本校には校訓はないが、「今日も楽しく元氣よく喜んで登校満足して下校」の合い言葉のもと児童の教育に当たっている。学校教育目標や合い言葉を具現化するために、人権教育の考えを基盤として、六つの取組重点事項を設定し学校経営に取り組んでいる。

### 三 特色ある教育活動

本校では何事にも協力的に取り組む職員員の雰囲気のみられ、児童の育成は担任だけでなく、学校全体の責任であるという雰囲気醸成されている。また、本校の歴史的な背景もあり、保護者や地域の方々も学校を誇りに思う雰囲気が高く、学校の教育活動に対する関心が高く協力的である。この強みを活かした協働した教育活動により児童の育成を目指している。

#### (一) 今和泉タイム

全職員共通理解のもと、習熟度に応じた指導「今和泉タイム」を四、六年生に実施している。担任は学級で個に応じた発展的な学習、他の職員は図書室で苦手意識のある児童に個別指導を行っている。学期ごとに国語と算数を中心に実施している。多くの職員が教室に入り指導することで、各児童の課題となる部分に分かるため、他の学年への指導にも役立っている。

#### (二) 全校選書会

本校には他の学校以上に新しい本が蔵書

#### (三) 学校応援団

されている。それは、PTA主催の全校選書会が本校の伝統行事となっており、毎年、PTA活動の益金を基に、各児童が自分の気に入った本を一冊選び、学校の図書室に全校児童分の本が増えていくからである。児童にとっては自分が選んだ本が図書室に残っていくという喜びや、親への感謝の気持ちも高まる素晴らしい活動である。この活動は本に親しむ児童や読書量の増加につながっている。

### 四

本市では「いぶすき学校応援団」を組織し、学校区ごとに地域の方々にボランティアで学校教育に協力していただいている。学校応援団は、本校の教育活動の質を高め、担任が不得意とする分野や多くの指導者が必要な場面で協力していただけるため、児童の学習内容への理解も深まり、学びに向かう力を高めるとともに、職員の負担軽減にも役立っている。また、この活動は地域との連携を深め、開かれた学校づくりにもつながっている。毎年、延べ百五十名程の方の協力をいただいている。

#### おわりに

本校では多様な教育活動を協働して実施することで、児童の成長や学校経営によい影響を与えている。今後も、保護者や地域の方々と連携を更に深めながら、全職員で児童一人一人の個性を伸ばし、未来を担う人材を育成していきたい。



## 少人数のよさを生かし、

## 一人一人に寄り添う教育活動

松ヶ崎小(隅) 西 武 久

### 一 はじめに

市街地から離れた本地域は、過疎化、少子化が大きな課題であり、本校の児童数も年々減少の一途をたどっている。本年度は、児童数八人と、正に極小規模校である。当然デメリットも少なくはないが、常に前向きな姿勢で、少人数なりのよさを生かしながら、子どもたち一人一人が達成感を味わい、成長できるように教育活動の推進に努めている。

### 二 少人数のよさを生かした教育活動の実践

(一) 個別最適な学びの実現に向けて【学習指導】

子どもたちは、各学級二～三人の完全複式三学級で学んでいる。授業では、複式学習指導を進める中で、それぞれの実態に即した課題設定や学習内容・方法等、個に応じたきめ細かな指導を行っている。

少人数指導の課題として、協働的・対話的な学びの場の確保や、それに伴う多様な見方・考え方を基にした考えの形成等の難しさが挙げられるが、オンラインによる他校との遠隔合同授業の実施によって、その解消を図っている。少人数学級同士の遠隔合同授業では、少しでも多くの他者の考えに触れることによって話し合いが活性化し、

一人一人の思考も広がり深まる。また、二校の複式学級担任が、それぞれの同一学年の子どもたちを相手に単式授業を行うことができるというメリットも生まれる。効果的な遠隔合同授業の在り方を計画的・継続的に追究している今日である。

(二) 豊かな心の育成を目指して【生徒指導】

極少人数では、学習指導と同様、一人一人の個性に応じたきめ細かな生徒指導が可能である。全ての子どもに十分に目が行き届くため、課題等に対しても、迅速に、かつ適切に対応できる。

子ども同士の関係性は、とてもアットホームで、常に穏やかな雰囲気に含まれている。また、学校生活の中では八人全員が一緒に活動することが多く、先輩は先輩を労い、教え導き、後輩は先輩を敬い、見習うという郷中教育的な要素が見られるのも特長の一つである。

子どもたちは、今後、進学したり社会に出たりすると、大勢の中で揉まれたり、多様な考えにぶつかったりする機会が必然的に増えてくる。どんな状況でも、自分に自信をもって、何事にも積極的にチャレンジすることができるたくましい精神を育てたいと常々思

っている。そのため、様々な行事・取組等の中で、主体性をもって活躍できる場を意図的に設けながら、子どもたちを鼓舞激励している毎日である。

(三) 故郷を愛し、誇りとする態度の育成を目指して【特色ある教育活動】

本校区は、自然・歴史・文化・産業等において、豊富な教育資源を有しており、それらを有効活用し、地域の方々と保護者の協力を得ながら、様々な取組を行っている。

主な取組の一つとして、ピワの栽培活動が挙げられる。本地域は、ピワ栽培が盛んで、旬の時期には、道路沿いの至る所でピワが販売されており、特産品としての価値が非常に高い。そのような貴重な地域素材であるピワを教材として、栽培方法や加工の仕方などを地域の有志に指導していただいたり、学校敷地内にあるピワ畑で実際に世話をしたりしながら、地域の産業に対する理解や興味・関心を深めるとともに、郷土を誇りに思い、大切にしようとする態度を育んでいる。

### 三 おわりに

少人数での活動では、全ての子どもが主役になれる。活動に深く関わられるチャンスが豊富にある。これからも、豊かな体験活動や他者との交流などを通して、子どもたちが、多様な価値観に触れたり、自分のよさを発揮したりできる機会を大切にしていきたいと考えている。そして、一人一人が自分に自信と誇りを持ち、たくましく生きていく力を育むことができるよう、励まし、見守り続けていきたい。



## 『よさ』を生かし、 伸ばし合うキラリ輝く

### 福平っ子の育成

福平小(市) 藤 崎 隆 博

#### 一 はじめに

本校は、鹿児島市南部に位置し、創立百五十二年目を迎える。児童数は増加傾向にあり、現在、千百三十五名、学級数四十九学級、県費負担教職員数六十四名の大規模校である。

本校の学校教育目標は、「『よさ』を生かし、伸ばし合うキラリ輝く福平っ子の育成」である。今年度四月の着任と同時に、子ども自身の指導能力を伸ばすために、生徒指導の四つの視点①自己存在の感受への配慮②共感的な人間関係の育成③自己決定の場の提供④安心・安全な風土の醸成をブランドデザインに加筆した。そして、それを生かした、子どもが輝く学校づくりに教職員一丸となって取り組んでいる。

#### 二 取組の実際

##### (一) 「学習者主体の授業」づくり

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、「学習者主体の授業」づくりに取り組んでいる。一学期は、生徒指導の四つの視点を踏まえた授業を七本実施した。その際、同僚性を生かしてチームで授業づくりに取り組むことと、学習指導案に四つ

の視点を明記することを確認した。課題解決場面での視点③、対話場面での視点②等を意識した授業を展開することで、生徒指導を内在化させた授業に迫ろうとした。二学期に入ると、「自由進度学習」に挑戦する学級もあり、学びを自己調整するよさを実感する子どもが増えてきた。このような取組を通して、子どもの学びに向かう力や自己肯定感が少しずつ向上している。現在も「子どもの学びと教職員の学びの姿は相似形」を合い言葉に、「学習者主体の授業」づくりに奮闘している。

##### (二) 鹿児島市学校版環境ISO認定校の取組

本校は、「環境目標」や「環境行動計画」に基づき、環境ISO委員会を中心として学校版環境ISOに取り組み、その内容が分かるように「福平小エコ宣言」を作成している。特に、「節電」「節水」「ゴミの減量」について、全校で取り組み、全学級で、環境ISOチェックカードに基づき取組の振り返りを行っている。その後、ISO委員会がチェックカードを回収し、取組の結果を、各学級へフィードバックしている。このように、子どもと教職員が一体となって、環境保全、資源の有効活用等、「環境にやさしい学校づくり」に積極的に取り組む中

で、子どもが個々のよさを発揮し、他者と協働する姿が見られるようになってきている。

##### (三) 地域素材の活用

〜平川動物公園との連携〜  
校区内には、様々な地域素材がある。ここでは平川動物公園との連携を紹介する。本校は、教育課程に、一年「動物園探検」、三年「調べよう平川動物園」、六年「平川動物公園清掃」を位置付けている。六年の活動は、「ボランティア活動を通して、豊かな社会性を身に付け、よりよい社会づくりのために主体的に生きていくことができる子どもを育てる」というねらいの基に実施している。主体的に行動し、地域に貢献するよさを学んだ子どもたちは、始業前に学校の正門付近の清掃ボランティアに取り組んでいる。また、同園主催の動物愛護児童作文コンクールに積極的に応募しており、今年度は鹿児島市長賞を受賞した。教育活動の振り返りを重視し、体験活動を言語化する中で、子どもが自己や社会と対話する学びになっている。

#### 三 おわりに

「春は出会いの季節です。人は様々な出会いを通して変わろうとします。よりよく生きようとするものです。」これは、毎年四月の職員会議で教職員に語りかけるメッセージの冒頭部分である。先行きが不透明な予測不可能な時代を迎え、授業観や子ども観等の「観」のアップデートが求められている。旧態依然とした教育に終止符を打つには、「よりよく生きるために変わろう」と学び続ける教職員を育てていく必要がある。このことは、子どもが「よさ」を生かし、伸ばし合うキラリ輝く教育を推進する原動力になると確信している。



## 「走れ」高山

高山中(隅) 瀬戸口 浩 司

### 一 はじめに

広大な肝属平野の真ん中を流れる肝属川の支流、高山川沿いに本校はある。本校の隣には、町の陸上グラウンド、野球場、体育館が二棟、テニスコート、プール、屋根付きゲートボール場、文化センター、図書館、そして教育委員会まである。ちよつとした文化・スポーツ拠点施設である。生徒数は、現在二五二名、保護者や地域の方々との連携を図りながら教育活動を推し進めている。

今年度は、運動部活動が好成績を収めた。校長室には二十本の優勝旗が並んでいる。優勝旗を持って帰るときは生徒の顔はもちろんキラキラ輝いている。夏休みは九州・全国大会に五つの部活動が出場した。私も放課後毎日練習を共にした生徒と全国大会へ同行し、生徒が輝く姿を見ることができた。

日頃、生徒会が呼びかけている語先後礼のあいさつ、無言集合、無言作業、整理しての教室移動の徹底などに下支えされた、特色ある活動の様子を紹介したい。

### 二 朝ラン

生徒会が呼びかけて週三回、希望者参加のランニング活動を実施している。通称「朝ラン」である。朝七時十五分に遅れることなく

スタートし、多い日は百名以上が参加する。集合するまではあいさつの声飛び交っているが、集合・整列後は、準備運動と整理運動の号令以外はほぼ無言で、十五分間ほど全員が黙々とグラウンドを走る。職員も半数近くがグラウンドに立つ。雨天時は体育館内を走る。走り終えた後は、汗をかきながら笑顔で校舎へ向かう生徒も多い。全員が達成感を感じた表情で活動を終えている。

現在北薩地区の中学校に勤務されているK校長が在任中に始まったと聞いている。六年程継続しており、本校の伝統になってきている。部活動の好成績もこれが基盤となっているのではないと思う。また、遅刻する生徒がほとんどいないことも、この活動の効果であると考えている。

### 三 「やぶさめ」

約九百年続く伝統行事「やぶさめ祭」への協力を全校体制で行っている。例年、馬に乗って矢を放つ「射手」を町内の中学二年生が務める。その射手と、前年に射手を務めた三年生の「後(あと)射手」、この二人が主役となり、約五十日間を馬と共に練習に励む。この練習に、放課後ボランティアとしてクラス単位で生徒が参加している。目の前を馬が

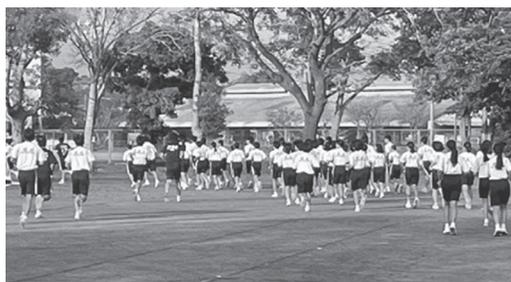
### 四 おわりに

これらの活動は、いずれも始業前と終業後の活動であるが、保護者や地域の方々、そして、職員の理解と協力を得ながら行われている。これらの活動を通して生徒は達成感を味わい、自己有用感を育んでいる。体力やコミュニケーション力など、社会を生きていくための様々な力も身に付けていく。

コロナ禍で、ほとんどの学校から消えていったと思われる体育祭の足並みを揃えた入場行進も本校は行っている。体育祭の開会式をはじめ、全校集会等での一糸乱れぬ「礼」は、卒業生から「かっこいい」母校の誇りだとの声が開かれる。

伝統ある活動を通して生徒が成長し、それを誇りに思っている。これからも継続していきたい。背中を押してあげたい。

決して「古きよきもの」に固執しているわけではなく、昭和の香りや古の香りを漂わせながら、このまま走れ！高山。



# 心に残るひまわり



## 産んでくれて、ありがとう

高来小(北) 岩 元 秀 光

あれから、二十年余りが過ぎたが、今でもよく覚えている。それは、私が派遣社会教育主事として従事していた頃、当時の教育長が朝礼の中で述べられた。

うつむき加減で、声を震わせながら、「この歳になって、誕生日に思うことがあります。誕生日には皆さんよく、『誕生日、おめでとう』と祝われますが、私は亡き母を思いながら、誕生日には『産んでくれて、ありがとう』と母に伝える、母に感謝する日であると思うのです。…」と、涙ながらに、静かに話された。

それを聞いた当時の私は、教育長のその思いに深く胸を打たれ、自らの誕生日に、思い切っ

て喜界島にいる母に電話をした。照れと恥ずかしさでいっぱいになり、なかなか言葉にならない。迷っている私を見ていた妻からは、「早く伝えたら…」と、軽くたしなめられた。意を決して、「…産んでくれて、ありがとう。」と、言ってみた。すると、「いいいえ、こちらこそ。ありがとう。」と母。受話器の向こう側ではあるが、喜んでる姿が見えた気がした。それから、毎年、誕生日のたびに、感謝の言葉を伝えるようになった。次第に、少しずつすんなりと言えるようになった。

今、校長となり、子供たちの前でこの話をした。真剣に聞いてくれる子供たちを見て、思わず泣きそうになったが、必死にこらえた。

後日、「校長先生、お母さんに『私を産んでくれて、ありがとう』って言ったよ。そしたら、『ありがとう』って言ってくれたよ。うれしかったあ…」と、笑顔で話してくれる子供がいた。また、「私も、『ありがとう』を伝えてみたいと思います…」などと言ってくれる職員もいて、思わずほくそ笑んだ。

言葉の力は大きいし、成果を得たその瞬間瞬間が、教師冥利に尽きる。

おかげさまで、今年もまた、八十四歳になる母に「産んでくれて、ありがとう。」を伝えることができた。

校長として、これからも、子供たちの笑顔と健やかな成長のために、言葉の力を信じて、魅力ある学校づくりに精進していきたい。

## 救われる人がいる

第一鹿屋中(隅) 川 原 敏 幸

初めての校長として、赴任が決まったときのこと。何よりも不安が先に立ち、校長という重責に対する緊張、そして「自分に務まるだろうか」という自信のなさ、これまで積み上げてきた経験や知識が、一瞬で色あせてしまったように感じ、不安な気持ちばかりが押し寄せていた。

そんな中、普段からお世話になっている先輩校長との会話が、私の心に大きな支えとなった。その先輩は、私の不安を察したのか、穏やかな笑顔でこう言ってくださった。「あなたが赴任することで、救われる職員や生徒が必ずいるはずだ」と。

その言葉は、私の心に深く響き、これまで考えていた「校長とは何か」という問いに対する視点が、一気に変わった瞬間でもあった。それまで私は、「指導力」や「管理能力」といった責務の面だけに囚われ、苦しい思いをしていたのだと思う。しかし、先輩の言葉は、「人としての存在」が持つ力を教えてくれた。校長としての役割は、何も完璧なリーダーシップを発揮することだけではなく、その場にいることで誰かの支えになることも大切なことである。私はその言葉に救われ、自分らしく誠実に取り組む勇気を取り戻すことができた。

赴任して、私は、可能な限り職員や生徒の様に目を向けるように心掛け、職員の悩みや不安に耳を傾けることを大切にしてきたつもりである。大きなことに取り組むより、まずは職員を支えることを第一に日々を過ごすことを大切にしたい。

「誰かが救われる。」この言葉は、私自身の心の拠り所であり、これからも誠実に教育に向き合っていく原動力となっている。先輩の言葉に感謝しつつ、今度は私がそのような存在になれるように、日々精進していきたいと思う。

## 教師は○者、○者、○者であれ

東天城中(大) 大田 耕造

私が大学時代に教育実習でお世話になった指導教官からの問いの言葉である。

「大田さん、『教師は○者、○者、○者であれ』と言われるけど、○印の中にはどんな文字が入ると思う」と問われ、回答に困った記憶がある。その言葉は今でもしっかりと脳裏に焼き付いている。

『教師は学者、医者、役者であれ』と言うのだ。

これから教職を目指そうとする私にとって、教育実習の場は教師という仕事には多様な役割があることを学ぶ機会となった。

それから、教職の道に進むと学生時代に聞いた話に二つの役割(易者・芸者)が追加された『教師五者論』という言葉を知った。

○学者としての教師

学問に対する情熱や学びの楽しさを生徒に伝え、探究心を育てる。

○医者としての教師

心身の健康を見守り、生徒の心に寄り添いながら安心を提供する。

○役者としての教師

教室という舞台上で生徒の関心を引きつけ、魅せる授業を行う。

○易者としての教師

生徒の個性や適性を見極め、その成長をサポートする役割を担う。

○芸者としての教師

教室という空間を生徒が積極的に学びに取り組める雰囲気にする。

「なるほど」と思い、教頭時代は大学時代の自分に重ねるように教育実習生や若い先生方には五者論を問いかけながら、雑談したものだった。

令和に入り、同じような内容を職員に問いか

けるとどうだろうか。「これ以上教師の役割を増やすんですか。」と返ってきそうである。いささか昭和の匂いがする五者ではあるが、教師の資質として捉えてほしいと感じる。

私なりの令和版五者を考え、再び職員と雑談してみたいと思う。

## 幸せでした

南薩特支 山下 英一

澄み渡る空の下、冷たい空気が頬を差し始めた平成九年十二月九日連絡があった。「先生、うちの子が亡くなりました。」彼女は小学部六年生だった。十歳まで就学猶予で自宅におり、五年生から訪問教育をスタートし二年足らずの間、私が担任をした。

週二〜三回片道八十分掛けて自宅を訪問した。特別支援教育もままならず訪問教育など本当によく分からない未熟な私の訪問を毎回歓迎してもらった。この子に何をすればいいのか悩みながら、いろいろな準備をして行き、母親と多くの時間語った。時には父親も一緒だった。両親は「就学猶予だった我が子が形はどう

であれ、教育を受けていることがとても嬉しい。」とよく言った。

令和六年八月「不登校児童生徒が欠席中に行った学習の成果を成績に反映する場合を定める告示」が公布施行された。それによると、「不登校児童生徒の中には、学校外の機関や自宅等において（中略）懸命の努力を続けている者もいる。このような児童生徒の努力を学校として評価し支援することは重要（中略）学習意欲に応え自立を支援する上で意義が大きい」とある。また、「令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）」のテーマは「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」である。まさに「誰一人取り残さない学びの保障」が求められている。

月命日には彼女の家を訪問していたが、翌年三月に私は異動した。その後、一年忌、三年忌、十三年忌と訪問し仏壇にいる彼女を拜んだ。そこで母親から掛けられた言葉は「先生、私たちは幸せでした。」だった。当時の私は、彼女に何もしてやれなかった。それでも学びの機会だけは設けることができたのかも知れない。母親の温かい言葉を胸に刻み、目の前にいる子供たちとその後ろにいる母親たちを応援し続けたいと思う。誰もが「幸せだった。」と思える日が来ることを願って。

## ある日の校長講話



### 自分の目標に向かって（始業式）

帖佐小（始伊）上 村 嘉 代

今日、みなさんが元気に登校し、三学期の新しいスタートを迎えることができて、とても嬉しく思います。

さて、今年は、令和七年、西暦二〇二五年です。十千十二支で言うところ「乙巳」「きのと・み」の年です。「きのと」は、困難があっても紆余曲折しながら進むことや、しなやかに伸びる草木を表し、「み」は「再生と変化」を意味しており、この二つの組み合わせである「乙巳」には、「努力を重ね、物事を安定させていく」といった意味があるそうです。

今年、どのような一年にしようかと、みなさんも様々な思いや願いをもって新年を迎えたことでしょうか。「一年の計は、元旦にあり」と言われます。この言葉は、何事も最初が大切で、一年間を充実させるためには、年の初めに、自分で目標を決めて取り組むことが大事だという意味です。そこで、今年一年を始めるに当たり、みなさんに次のことを考えてほしいと思います。

第一に、こうなりたいという自分の姿を思い浮かべ、目標を立ててください。第二に、目標に向かってやるべきことを決めてください。まず、何から始めるのか、それができたら次に、いつ、何をするのかという、やるべきことと、順序を決めることです。そして、第三に、進んで実行することです。何事も、はじめの一步をしっかりと踏み込むには、うんと力が必要です。思い切って始めて、継続すること、みなさんがこうなりたいと思う自分に近づくことと思います。

三学期は、それぞれの学年の学習や運動など、身に付けるべきものを自分のものにして、次の学年に備える学期です。目標を達成できた満足感と自信をもって、一年間を振り返ることができるよう、努力しましょう。一人一人の頑張りと活躍を楽しみにしています。

## いつ来てもおかしくない地震

「備えあれば憂いなし」

知根小(大) 上加世田 栄次

九月一日は、何の日か知っていますか。「防災の日」です。なぜ、この日が「防災の日」なのでしょう。それは、一九二三年に関東大震災という大きな地震があった時に、たくさんの方の命が失われたからです。その日のことを忘れないように、そして、日頃から災害から身を守るように心掛けようということで「防災の日」が決められました。

八月二十一日、先生たちは根瀬部に向かう歩の上の方へ駆け上って行きました。十一月一日に地震・津波の避難訓練があります。そのため事前準備として避難場所の確認に行きました。地震はいつ来るか、詳しいことはあまり分かりません。明日来るかも知れないし、何十年後かも知れません。しかし、いざという時に備えておけば、被害を最小限に食い止めることができます。これを「備えあれば憂いなし」と言います。いつも、こんな風にすれば助かるんだということをきちんと身に付けておきましょう。

東日本大震災の時、釜石市の小中学校では津

波の被害者がいなかったそうです。どうしてかというと、釜石市では、大きな地震が来たら大津波が来るということを知っていて、その時どうすればいいかを日頃から訓練していたのです。少しでも早く、少しでも高い所に、命を守るために避難しようということを徹底的に訓練していたそうです。人は一番に逃げたらかっこ悪い。誰かが逃げたら逃げようという気持ちがあるそうです。誰かがやったら自分もやろうかなという気持ちがあるそうです。でも、そうではなく、「命を守るために率先して、一番にやりましょう。」ということを繰り返し訓練し、大切な命を守るために、そのとおりに行動できたといいことです。いざという時にどういう風に行動したらいいか一人一人がしっかり学んでほしいと思います。大事な命は一つだけです。自分で自分の命を守るように学んでいきましょう。(本校は目の前は海。左右・後ろは山々に囲まれる。)



## 改めて基礎・基本の徹底を

武岡台高 亀 田 誠

皆さんは、よくパンを食べますか。「朝食ベてきた。」「ご飯党だからあまり食べない。」いろいろだと思いますが、どうでしょうか。

私の高校時代の同級生で、現在製パン会社を経営し、毎日パンを作っている友人がいます。彼は四〇歳を過ぎてから、家業であったこの会社を引き継ぐことを決め、そこから本格的にパン作りの修業を始め現在に至っています。その彼が「毎日同じ工程を踏んだとしても、昨日と同じパンはできない。ましてや、自分が理想とする完璧なパンはできない。」と話してくれました。そして、毎日のパン作りで最も大切にしていることは、「体調管理」「材料の計量を間違えないこと」「温度管理を徹底すること」の三点だそうです。「体調管理」の大切さは、全てに共通することなのでよく理解できますが、あとの二つはパン作りの基本中の基本なのだそうですが、ここがおろそかになると、まずお客様に買っていただけるような商品にはならないと言っていました。

この話から、自分自身の行動を振り返ったとき「基礎・基本」となっていることが徹底でき

ているのだろうか、考えさせられました。日常の仕事はもちろん、生活していく中でも「慣れてしまっている。」ことで、ついおろそかになっていくのではないかと感じたからです。皆さんも「基礎・基本」に立ち返ることの大切さを、日々の学習の中や部活動の練習で先生方から指導を受けたり、皆さん自身も考えたりすることがあると思いますが、徹底できているでしょうか。久しぶりに友人と会い、話したことで今一度「基礎・基本」となることに立ち返り、それを徹底することの大切さを考える機会となったことを、今朝は、皆さんに伝えたいと思います。



# 話のひろば



## 伝統を継承する

### ための見直し

松原小(市)

徳 永 一 哉

しひしと感じている。

本校の水泳同好会が毎年七月に行っている「錦江湾横断遠泳」。大正十五年に始まり、戦争等の理由で中断されていた時期もあったが、昭和四十一年に再開され、今年度で第五十九回目であった。来年度は、節目の第六十回となる。

水泳同好会には、四、六年の希望する児童が参加する。初参加・未完泳者は赤帽、一回完泳者は黄帽、二回完泳者は青帽を付けて参加する。五月の連休明けから練習を開始し、わずか三か月弱で赤帽の児童も約四kmを完泳できるまでに泳力を高めるわけなので、驚異的である。子供

松原小学校といえ  
ば、「遠泳のある学  
校」というイメージ

を以前から抱いてい  
た。本年度着任して、  
その歴史の重みをひ

たちの頑張り、コーチ陣の情熱的な指導、同好会保護者等の献身的なバックアップで、毎年多くの子供たちが完泳していく。

水泳同好会からコーチとして委嘱されるのは、本校の職員である。コーチとして委嘱された本校の職員のみで指導に当たる。指導のノウハウを、これまでコーチとして携わった職員から代々引き継いできている。本務ではないが、時間外に情熱をもって指導に当たる姿に、感謝の思いでいっぱいである。

同時に、校長としては、今後も職員頼みの指導体制でいいのかという思いもある。この働き方改革の時代に、本務もありながら、遠泳の指導で疲れた職員の姿を見ると忍びない。また、一学期の大事な時期に、本来の教育活動の充実も図りにくい。

他校では、一般の方にコーチを委嘱している例があるが、松原小の遠泳は代々「職員だけで指導」に当たることを一つの売りにしてきている。保護者やOB、地域の方々もそれが当たり前という感覚である。したがって、この指導体制を変えていくことは容易ではない。

この歴史ある錦江湾横断遠泳を今後も安定的に継承していくためには、このように見直していかないといけない部分もある。関係の方々にも強く働き掛けていきたい。

## 大隅の父

### 永田良吉

西俣小(隅)

松元 優彦

永田良吉をご存じだろうか。簡単に経歴を記すと、大正から昭和にかけての政治家で大始良村議、大始良村長、県議会議員、衆議院議員、鹿屋市長を歴任。海上自衛隊鹿屋航空基地や星塚敬愛園の誘致、高隈ダムの建設推進、鹿屋中学校(現鹿屋高校)の設立等に尽力し、鹿屋市初の名誉市民となり、その業績から「大隅の父」と呼ばれ、鹿屋市役所には胸像が設置されている。また、「大隅は血が通っていない」「政治は愛なり」と大隅の開発に情熱を注ぐ一方で自身の財には全く執着がなく、三十六回の差し押さえがあつたくらいである。

この永田良吉のこれまでの教育資料を調べてみると、昭和六十三年に鹿屋市教委が作成した郷土教育で使う教師用指導資料「鹿屋の先人」に『敬愛園生みの親』『大隅開発の父』という二つの資料が、令和五年に同じく鹿屋市教委が発行した「かのや風土記」に永田良吉の人物像が掲載されている。

しかしながら、年配の方々が「良吉さん」と

親しみを込めて呼び、良吉さんの思い出を語るのによく耳にしたが、鹿屋市で小・中学校を過ごした若い世代や本校の児童・職員はそう詳しくないような気がしていた。

そんなとき、永田良吉は校区内の永野田町の出身で、現在の町内会長の永田良文さんは良吉さんのお孫さんにあたることを知った。その御縁もあつて、二年前の創立百周年の記念式典で子どもたちが良吉さんのことを調べて発表した。すると、子どもたちは業績や人柄に触れて大きな感動と誇りを覚え、これからも良吉さんを学んでいきたいと話したので、本校では総合的な学習の時間で「大隅の父 永田良吉さん(十八時間)」を設定した。

それから私たち西俣小職員と児童は良文さんから講話を毎年聞いている。知れば知るほど、本校児童と職員に止まらず、鹿屋市や大隅の児童、大隅に赴任した職員が学ぶべき価値のある人物ではないだろうかという思いを強くしている。そして、永田良吉を次の世代に是非語り継いでいけたらと願っている。

## 夢の叶え方

南界小(熊)

芝原 にほ

大谷翔平選手の活躍がすさまじい。大谷グロープ到着後、本校では、中央玄関に「南界ドリームロード」と称し、大谷選手のマンガラチャートを参考に、極々簡略化した夢実現シートを全児童十三人分掲示している。

本校の夢実現シートのテーマは「ミッションをクリアしてなりたい自分になろう」。将来の自分の姿を思い描き、そのために「今」何を頑張るのかを考える構造となっている。全校朝会の時間を使って全員で取り組んだ。そのとき、職員室に戻った新採の事務職員が「自分が子どもの頃、将来の夢なんて考えてたかなあ。」とつぶやいた。確かに、私自身のことを考えてみても、教員になりたいと思つて、道筋を考え、たゆまぬ努力をしてきたわけではない。大学進学に当たり、向いているかと思つた程度なのである。

そんな私が語つても、説得力ないなあと思つていたところ、大きな出会いがあつた。ニューヨーク生まれニューヨーク育ちの日本人。母親が本校区出身で帰省するので「在島中、学校の

ピアノで練習させてほしい。」と連絡があった。子どもたちの授業には影響ない所に置いてあるピアノで三日間、半日練習した。大学院で経済学を学び、セミプロとして世界各国で演奏経験があるらしい。せっかくの機会なので「夢実現講話」と題して子どもたちに話をしてもらった。「昔からピアノニストになりたかったが、ピアノだけをしてきたわけではなく、学校の勉強も一生懸命努力した。そのおかげで、今、経済学という新たな道が開けている。」と話してくれた。そうか、これが小学生に夢を語る答えだ。

ニューヨークと種子島で手紙のやり取りをした後、子どもたちに伝えた。「今、学校に来て勉強を頑張るのは、夢を実現するための努力の仕方を学んでいるのです。」と。そのときに自分に与えられている課題に精一杯取り組むことも夢実現のポイントなのだろう。その過程で、方向性が変わったとしても、それはそれでよいではないか。定年まで残りわずかとなった今、教員は天職だったと思える私も「夢を実現させたね。」と自分で自分を褒めていいのかもしれない。

## 読書案内



■上橋菜穂子 著

### 天と地の守り人

宿利原小(隅) 濱田直子

「おすすめの本の紹介をお願いします。」

読書週間の取組として、先生方からの本紹介がよく行われます。こんな時、子ども向けの本なので何にしようか迷われるのではないでしょうか。そんな中、学校の図書館で見付けたのがこのシリーズです。この時出会ったのは、「精霊の守り人」というシリーズ最初の本でした。読んでみると、わくわく、ドキドキの中に、温かい人間の心情や人々の関係の複雑さが盛り込

まれた本で、早速「おすすめの本」に紹介しました。そして、全シリーズを読むこととなりました。

このシリーズの面白さは、主人公新ヨゴ皇国皇子チャグムと女用心棒バルサだけではなく、それを取り巻くたくさんの登場人物の人物や思い、国同士の関係など、たくさんの絡みがあることです。どの人物も「よりよく生きていこう」とする中で、人を救うことで他の人を傷つけたり、正義と正義のぶつかり合いによって悲劇を招く事になったりと、事件や出来事を多面的に捉えることの大切さを思い知らされます。

中でも、シリーズ最後となる「天と地の守り人」は、青年に成長したチャグムとバルサが中心となる話です。侵略してくる大国に抗うため、他国同士が手を結ぶ架け橋役となる場面でのチャグムの行い。そしていよいよ、実際戦火に向かわなければならぬ時のチャグムのバルサに向かつての問い掛け、「人を殺したら・・・」という場面でのバルサの答え。この本の中でも大変に残るものでした。本当に尊い行いであり、深い言葉だなと感心するばかりでした。また、それとともに深い感銘も受けました。

いま世界中では、戦争で人々が苦しみに泣いている姿を目にします。それぞれの国や人々には、それぞれの正義があるのでしよう。ただ、悲劇の中に生まれるものの悲しみや憎しみが、また新たな悲劇を生まないことを願うばかりです。この本は、国同士の思惑、人々について考えさせながら、その中に希望を与えてくれる本です。

偕成社ワンダーランド 千六百五十円

### ■片川儀治 著

先生、教えて！

勉強ぎらいなボクが親も学校も

きらいなワタシが思う50のギモン

吉松小(始伊) 坂本 敬

「どうして勉強しないといけないんですか。」  
「どうして命は大切にしないといけないんですか。」

教師生活の中で、子供たちから何度か質問された。そして、その度に何となく自信がもてず、

もやもやとした気持ちで答えてしまったという後ろめたさがある。

そんな子供からの素朴ではあるが、回答にやや窮する質問に対し、ある程度の「納得感」をもたせる回答をしているのではないかと思うのが、本書である。

では、なぜ「納得感」をもたせられそうなのかというと、歴史や偉人の生き方にヒントを見出しているからである。例えば、「学は人たる所以を学ぶなり」という吉田松陰の言葉と、塾生たちへの接し方を通して学ぶことの目的を説く。また、本当は生きたくてたまらなかつた明日を、大切な人たちを守りたいという一心で特攻に捧げた青年たちの姿から、命の尊さを考えさせる。さらに、自分の力ではどうすることもできない出来事が起きた時に、それを天命として全て受け入れ、人格を磨いていった西郷隆盛の生き方から、自分のことだけを優先せず、周囲の人のためにも尽力することの大切さに気付かせる。

その他、夢と志、人生の目的など、生きる上で普遍的とも言える質問と回答にあふれ、私たち大人にとっても、人生を深く見付けることのできる一冊だと感じている。そして、50のギモン一つ一つとその回答を読みながら、「ああ、あの時の質問に対して、私もこう言ってあげればよかった。」と、何度も思わされた一冊でもある。ただ、過ぎ去ってしまった時を巻き戻すことはできないので、せめて次に質問される機会があれば、自信をもって答えてあげたいと強く思っているところである。

万代宝書房 千八百七十円

### ■中井由梨子 著

栄光のバックホーム

福平中(市) 大田 恭一郎

野球に人生をかけて、ひたむきに生きた青年の物語を、母親の目線で書いた本を紹介します。この青年、横田慎太郎さんは、私が教頭として勤務していた東市来中学校の卒業生です。

朝練から放課後の部活まで、野球に没頭した毎日を送っている少年でした。中学生の中ではひと際大きな体格で、ピッチャーと四番バッターとして、県大会優勝、全国大会出場と素晴らしい実績を残しました。練習では、「軟式ボールがここまで飛ぶのか」と、美しい線を描き体

育館まで届くボールに驚いたものです。

私にとつてはユニホーム姿ではなく、職員室掃除で大きな身体を折り曲げて先生方の机の下に潜り込んで雑巾がけし、終わった時に「教頭先生終わりました。」と満面の笑顔を見せてくれた姿が今でも目に浮かんできます。

今回紹介するこの本は、横田さんの少年時代から、高校・プロ野球に進み、引退するまでのエピソードや、闘病生活の中で家族が献身的に支えている様子や家族の思いを、筆者が母親の横田まなみさんを取材して綴ったものです。

阪神タイガースからドラフト二巡目で指名され、一軍での活躍が期待された矢先に脳腫瘍が判明します。厳しいリハビリを重ね復帰を果たしますが、視力の問題から引退を決意します。引退試合では、センター前に飛んできた打球を見事捕球し、ノーバウンドでホームに送球してランナーをアウトにしたプレーが「奇跡のバックホーム」として語り継がれています。

引退後の講演活動では、多くの人々に、「目標を持つて一歩一歩進めば、必ず幸せな日が来る」の言葉と勇気を与えました。しかし、残念ながら昨年、脳腫瘍のため生涯を閉じました。

横田さんの人生とキャリアは横田慎太郎著の「奇跡のバックホーム」をはじめ、ネット映像・ドキュメンタリー等で多くの人々に感動を与え

続けています。私自身が、横田さんの言葉や映像を見るたびに涙し、「一生懸命、楽しく」生きていかなければと励まされています。

幻冬舎 千七百六十円

## ■友道健氏 著

## 方円の器Ⅱ

川内高 新留 克 郎

広島県のとある中学校長であった筆者が、学校経営に当たつての熱い信念を記した一冊。筆者が師と仰ぐ儒学者、菅茶山の言葉に次のようなものがあるという。

「水には自分の形がない。重箱に入れると四角に、桶に入れると丸い形にと、器に合わせてたちどころに姿を変える。人もそれと同じで、入れる器（環境や教育、交友など）によって、よくも悪くもなるものだ。」

筆者は、中学校という学びの場が、無限の可能性を秘めた若者たちを導く最適の器になるよう努めてきた。

残念ながら、その志は五〇代後半に発症した血液のガンにより、道半ばで中断を余儀なくされてしまったが、筆者が、どのような思いで理想の器を作ろうと考え、行動してきたかが、克明に記されている。

校種は違えど、学校長としての筆者の気概や生徒・職員との向き合い方、環境を整えることの大切さなどが、様々なエピソードを通してひしひしと伝わってくる。大病を患ったことも加わってか、学校経営や生徒の健全な育成に全身全霊をかけて取り組んでおられる姿に強い感銘を受ける。

本の中には、ところどころ、筆者が書いた言葉が散りばめられている。どれも素敵な言葉であるが、その中の一つに次のような言葉がある。「心には形はない。しかし心ほど形に現れるものはない。」

ハッとさせられる言葉である。学校経営にせよ、職員や生徒への接し方にせよ、自分が発する言葉一つ一つにせよ、自分の言動に、芯の通った「心」があるかー自分自身を戒めることである。

可能性を無限に秘めた生徒たちが躍動するための学校経営とはどうあるべきなのか、改めて考えさせられる一冊である。

不知火書房 千六百元

## 一 トレラン（トレイルランニング）

「なぜ自分は山の中を走るのが好きなのか。」十年ほど前、そう自問しながら「奄美ジャングルトレイル」で金作原の原生林を駆けつけたのを憶えている。トレイルランニングは、主に山の未舗装路を走る競技だ。三時間近く走ったので、そんなことを考える時間もたっぷりあった。

小学四年生の頃、新聞配達をしていた。学校に行く前に走って配るのは大変で、普通に走ると配達先の猟犬に急に吠えられたり、放し飼いになっている薩摩鶏につつかれたりした。だからルートに工夫が必要で、民家の庭を抜けたり塀の上を走ったりした。そして、最終的には山一つ越してしまいうルートを編み出した。走り終わると真冬でも汗だくになったが、そのときの達成感と高揚感を四十歳近くになって思い出した。ダイエツトのためにジョギングを始めただの。それが高じてマラソンに挑戦し、やがてトレランにつながった。

山の中の緩やかな下りは極楽もので、時々調子に乗って曲がり切れず岩にぶつかって転ぶのもご愛敬。次々に変わる風景、樹々の香りや落ち葉を踏みしめる音を楽しむ。鈍重にして不器用なので、記録は伸びない。でもせっかくなら山の中で、というのが自分の結論だ。

## 二 キャンツー（キャンピング）

今度は小学二年生の頃。夏休みは、地域の子供会で近くにある蘭牟田池のキャンプ場に泊まるのが恒例だった。急な雨が多い場所、斜面を流れる濁流に怯えながらカレーを食べ

### 趣味・文芸

## トレラン、キャンツー、そして黄昏

市中(大)中山克彦

たのを覚えていた。そんな、不便だけど冒険的なところが好きで、教員になっても自分のクラスの親子レクリエーション決めではキャンプ推しだった。しかし、最近はそのように、バイクに乗っていくことが多くなった。キャンツーリングというものだ。思えば、昔は買った道具を使う楽しみが大きかった。しかし、年齢のせいも、やることや荷物を限定した方が楽しめるようになった。それでも前の日からツーリングバックとパニヤケースにテントや寝具、調理器具を詰め込んで出発する。バイクの運転は我ながら下手で、教習所からそのまま出てきたようなスピードで慎重に走る。春や秋はよくライダーとすれ違うのだ

が、陽気に手を振りやエー（ライダー同士がすれ違う時にするてぶりのあいさつ）をする人は余裕があつていいなと思う。

トコトコ走っているといつの間にか目的地に着く。とりあえずテントだけ張り、最寄りのスーパーで生鮮食材を買っていく。季節によつてはのんびりしているとすぐ暗くなってしまうが、こんなときこそ立ちゴケしないように注意する。料理といっても大概作るものは決まっている。スキレットにキノコの類とニンニク、その日に食べたい種類の肉を適当に切つて入れ、オリブオイルをかけて焼く。焦げる直前ぐらいが好みだ。ささやかな健康への配慮としてちぎりレタスとトマト程度の

## 三 黄昏

サラダを作る。そして、ちよつとだけよ、と自分たちに許可した「本日のお酒」で乾杯し、ちびちび、ごくごくとそれぞれのペースで飲む。炎のゆらぎを眺めながら他愛もない話をしていくとわりと早く眠気がくるので、早めにごそごそ寝袋に入る。テントで気持ちよく寝るには晩秋が一番だと思ふ。

ここ十年くらいで一緒に趣味を楽しんだ気が置けない遊び仲間が何人も逝つてしまった。喪失感で今は走ることもバイクもキャンプも休眠状態だ。おまけに急に体力が衰えてきた気がする。体のあちこちが痛く、走つてもすぐ息切れする。晩飯も酒とあてだけで簡単に済ませてしまふ。たまに作つても「なんだこりや定食」だ。そんな自分を受け入れ、仕事とのバランスを考えつつ、生活にささやかな楽しみをプラスして過ごしていきたい。

退職後は、祖父が庭でヤブツバキを眺め時間をかけてゆつくりと歩いていたような過ごし方がしたい。古くなった田舎家の修繕をしながら、たくましく育つたシマトネリコや俯いてなお美しく咲くクリスマスローズを愛でながら散策したい。そして、陽が傾きかけたら裏庭でたき火をしながら餅でも炙りたい。ときには芋の灰焼きでもしてみるか。傍らの竹ざるで猫が丸くなって寝顔を見せていたらこのうえない癒やしになるだろう。

まだまだ当分は余裕のない日が続くだろうが、いつかそんなふうにならば、大切な人たちの思い出に心ゆくまで浸る黄昏を過ごせたら本望だ。

## 歴史と文化の息吹を

## 感じる街 鶴田

鶴田小(北)

田畑悦郎



## 一 学校・校区の概要

本校は、令和四年四月に流水小学校と鶴田小学校(二代)が再編されてきた学校であり、赤い屋根の新しい校舎と緑の芝生に覆われた広い校庭が目印の、新設三年目の学校『鶴田小学校』の校名を冠する学校としては三代目である。

本校区は、薩摩郡さつま町のほぼ中央に位置している。川内川の清流が中心部を流れ、紫尾山系の山々に囲まれた自然豊かな校区には、宮之城温泉や鶴田ダム、さらには、中世のさまざまな史跡などがあり、観光地としても知られている。学校は、校区の中央部にある小高い湯田原台地にある(旧鶴田中学校跡地を活用し開校された)。

## 二 宮之城温泉

宮之城温泉はさつま町湯田(旧流水小学校区)の川内川中流左岸に開けた温泉街で、現在も数軒の温泉旅館が軒を連ねている。歴史は古く、温泉が開かれたのは江戸時代で、文政年

間に虎居大円寺の僧が発見したと伝えられている。もともとは湯田温泉と呼ばれていたが、昭和七年に宮之城温泉と改称されている。

また、『美肌の湯』として知られ、豊富に湧き出る湯量と泉質のよさが人気であり、古くから湯治場として多くの人が親しんできた。現在も地元住民のみならず、県内外からも観光客・湯治客の来訪が絶えない。

## 三 鶴田ダム

鶴田ダムはさつま町神子(こし)に管理所を有する、国土交通省九州地方整備局が管理する国土交通省直轄ダムである。ダムの型式は重力式コンクリートダムで、完成している国土交通省直轄ダムとして、また、重力式コンクリートダムとして九州最大の規模を誇る。川内川下流の洪水被害を軽減するとともに、クリーンエネルギーでもある水力発電で地域住民の生活を潤すことを目的として建設された多目的ダムで、一九六六(昭和四一)年に完成した。

ダム管理所のそばには『川内川大鶴ゆうゆう館』があり、館内には発電の仕組みを体験しながら学べる『発電展示室』や、ダムの機能や川内川流域での水害対策事業で完成した水路・堤防等を紹介する『川内川流域展示室』のほか、レストラン等も備えた複合施設となっている。レストランの名物は『ダムカレー』に加えて、『ダムチャーハン』もあり、ダム見学者や観光客の間で人気を集めている。

## 四 大閼陣跡・梅君ヶ城跡

大閼陣跡は、本校区の南の丘に位置する。天正十五(一五八七)年、島津氏第十六代当主である義久は、豊臣秀吉による九州征伐を受け、泰平寺(薩摩川内市)で秀吉と会見し、降伏した。帰路、秀吉は川内川沿いを遡り宮之城を通過し、鳶巢と呼ばれる丘に陣を敷き、数日間滞在している。当主義久の弟義弘も、秀吉の滞在中にこの場所で会見し、秀吉から大隅国を所領安堵されている。

秀吉は五日ほど鶴田に滞在し、曾木(伊佐市)に向け出発したが、その後、秀吉の小姓が梅君ヶ城の屏風絵をはぎ取り持ち去っていることが分かり、島津歳久(義久・義弘の弟)が家臣に返還交渉に向かわせた。秀吉はこのことを聞くと、絵を盗んだ小姓の指を切り、絵と一緒に送り返したという。この逸話の舞台である梅君ヶ城跡は、大閼陣跡の北側にあり、現在は島津歳久を祭神とする平松神社がある。

## 五 結びに

地域の歴史や文化の息吹を感じ、豊かな自然に触れながら、子どもたちが健やかに学びのびのびと成長できる環境が整う街、鶴田。今後も引き続き、地域と学校が連携し合い、地域の魅力を存分に活かしながら、鶴田の子どもたちの未来を支える教育の場としての役割を果たしていきたい。

(参考文献:『鶴田町郷土誌』『宮之城町史』)

# 笑い声は時代を超え 想像力は年を取らない。

夢を叶える秘訣は  
好奇心、自信、勇気、  
継続に集約される。

(ウォルト・ディズニー  
1901~1966)



佐多岬

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



## 一般財団法人校長会館だより

県校長会館主催の教育講演会につきましては十二月八日(日)に無事終了いたしました。

講演では、令和のDr・コトーこと、室原誉伶先生から、「離島の診療所から見える日本の未来」と題して、三か所の離島を経験して得た総合診療の価値とこれからの日本社会における有用性や、へき地での社会課題を社会の可能性ととらえて挑戦することの楽しさなどを拝聴することができました。

開催に当たって多くの方々にご協力いただきました。感謝申し上げます。

### 教育長異動

○再任 令和六年十二月十日付

南さつま市 北園 博之 氏

○再任 令和六年十二月十九日付

十島村 木戸 浩 氏

### 季節の言葉「師走」

炭売に 日のくれかかる 師走哉

与謝蕨村

## 編集後記



つい最近まで、暑さ対策をしていたと思えば、瞬く間に上着の必要な気候になりました。日本の四季を味わい損ねてしまった感じがです。

ある朝、公園近くを通ると、六十代の男性が公園のベンチ付近を使い回しのビニール袋とごみばさみを持ち、何かを拾っている光景を目にしました。よく見ると、男性が一生懸命拾っていたのは、たばこの吸い殻でした。アメリカで大活躍中の大谷翔平選手も率先してごみを拾うと聞いたことがあります。そのことを大谷選手は、「人が捨てた運を拾っている。」と話しています。ごみを捨てるのも人間、ごみを拾うのも人間、不思議です。日本人の美徳といわれる道徳心を間近に見て心の動いた一コマでした。

広報常任部員として、多くの先生方の実践や教育論などに触れ、どんな経験をされ、どんな人に出会ってこられたのかと、毎回多くの感動と刺激を受けながら、教育の大切さをあらためて実感しています。令和六年も師走となり、いよいよ新しい年を迎えます。

今月も御多用の折、玉稿をお寄せくださいました校長先生方に厚くお礼申し上げます。令和七年も引き続き「鹿児島の教育」への御協力をよろしく願っています。

福永 憲一(鹿児島聾学校)